



天命反転は何をすること なのか(2022年3月11日、 京都芸術大学)

人間の可能性

目次

- 天命反転を標榜するアラカワ+ギンズ構想は、4つの柱によって作られている。それらは彼らの構想を読み解く補助線でもある。
- (1)可能性そのものの次元の更新(ガブリエル、メイヤスーの可能性の拡張は、予想可能な可能性である)
- (2)言語の外延の拡張
- (3)ランディング・サイトは何を行うのか
- (4)身体—環境・生態学

アラカワ+ギンズ構想の補助線1(不可能性への挑戦)

- 不可能への挑戦
- 「不合理ゆえに我信ず」ではなく、「不可能ゆえに我信ず」、というありかたをしている。可能-不可能のラインは、基本的には、これまでの経験でラインを引いて理解している人が多い。だが、まったく別の事態が起こりうる。
- 矛盾は不可能である、ということも留保する。矛盾は、人間の言語の本性であり、言語の論理は、人間の可能性の限定でもある。そのためこれは「人間」への挑戦でもある。
- 「死なない」というスローガンが、ここから生まれている。

アラカワ+ギンズ構想の補助線1

- ここでは現に今はないが、可能性として在りうることだという「可能性」が問題になっているのではない。「可能なものは、まさに可能であることによって現実的である。」これはギリシャの「メガラ派」の言い分であり、現在のメイヤスーやガブリエルの前提する「予想可能な可能性」の論理である。
- これに対してアラカワ+ギンズの可能性は、これまでいまだ一度も起きたことがないことであり、特徴は、(1)それを経験するものが当面何が起きたかがわからない局面を通過すること、(2)ある事態が出現することで、それまでの経験の幅が全面的に更新されること、(3)それはホモ=サピエンスの進化に対応するようなものであること、が含まれる。

アラカワ+ギンズ構想の補助線2 語の外延を変更する

- 語の外延の変更
- 語は、一般に「外延」(集合の範囲)と「内包」(意味内容)からなる。語の外延を変える。生命とは何であるかを考えても、さらに別様な生命体がありうるのだから、内包(語の内容を支える必要条件)から語を規定することはできない。
- そのため語を翻訳することは、困難に巻き込まれる。むしろ外延の変化をもたらす。ブリキで作った樹木を、「生命」だと呼んでみる。すると生命の内包が変化してしまう場面に直面する。

アラカワ+ギンズ構想の補助線21

- 概念的、意味論的に思考を進め、言語の延長上に言語的に物事を考えるのではなく、むしろ「生命の事例」(外延の一つ)を作り出した方が近道である、と考えていく。たとえば人間について言葉で考えるのではなく、ロボットを作るなかで、ロボットをつうじて人間について考察する。
- イタリア滞在中に、ダヴィンチの遺稿を英訳してもらい、そこに走り書きで「生命を作だすこと」と書き込んであることを見出し、アラカワはこれだ、同じ考えだ、と意を強くもった、と本人が語っていた。

アラカワ+ギンズ構想の補助線22

- 言葉は、シニフィアン—シニフィエの一对のつながりで出来ている。海(umi)というシニフィアンと青々と広がったもの(シニフィエ)が一对の組み合わせである。ソシュールはこれに注目して言語学を組み立てた。ところがシニフィエの現実的イメージが決まらない多くの語がある。神、存在、世界、死、そして運命もそうである。これらは外延でも内包でも確定できない。
- イメージはできるが、その内実が決まらない。こうした語に対して、イメージを拡張するように、語のイメージを変更していく。これがアラカワ+ギンズが戦略的に実行したことである。

アラカワ+ギンズ構想の補助線23

- イメージの世界を、意味や意味理解ではなく、経験の範囲を広げるように活用して言語表現を行う。イメージ語を過度に活用することで、経験に分散する傾向を強く作り出し、経験のバリアー解除をもくろむ。
- 他方、それに連動する制作物を作ってしまう。天命反転地のシリーズが形成される。イメージの拡張と制作を、二重化する課題として実行する。

アラカワ+ギンズ構想の補助線24

- 言語に重さを掛けてはいけない。言語をイメージとして分散的に活用する。(概念言語ではなく、像言語を活用する)
- アラカワ+ギンズの「生命」や「人間」は、外延として見れば、「来るべき生命」、「来るべき人間」であり、それぞれ外延の範囲は決まらない。意味論的には、「宙吊りにされた言葉」であり、統語論的には、「覚悟を決めた誤用」であり、語用論的には、語そのものへの挑戦である。翻訳の困難は、ここから生じる。

アラカワ+ギンズ構想の補助線3 ランディング グ・サイト

- 生命を作り出す、どうやるのか、何を使ってやるのか、おそらくアラカワとギンズでは、構想上、どちらが早いかを競っていたところがある。(よくケンカした) アラカワのように制作から構成的に組み立てるか(建築)、ギンズのように別のシステムの作動を活用して、別の存在が偶然出現することを基本にする(自己組織化—オートポイエーシス)かの違いが残る。
- アラカワは「構成的決定論」を取っていた。つまり制作をつうじてあらゆることを制御できると考えていた。これに対しては、自己組織化の揺らぎがあれば、決定論にはならないことを、ギンズは主張していた。「種」は相当に信用できるものであるが、種そのものを新たに作り出して、それが自己形成する場所を設定してみる。——ここからみずからを「コーディーノロギスト」だとする自己規定が生じる。(アラカワ、ギンズの共同戦線)

アラカワ+ギンズ構想の補助線31

- ランディング・サイト
- アラカワ+ギンズは、制作とからめて、最も必要で、不可欠な「行為能力」が何であるかを考えようとしていた。それが「ランディング・サイト」である。位置の指定という行為である。歴史上さまざまな前史があった。
- デカルトの言う「延長」は、不正確で精確には位置のことである。位置と位置の関係が延長であり、位置が決めれば、解析幾何学に接続できる。

アラカワ+ギンズ構想の補助線32

- デカルトの延長は、不正確で精確には位置のことである。位置と位置の関係が延長であり、位置が決めれば、解析幾何学に接続できる。
- 物の性質のうち、条件次第で変化してしまうものは、「方法的懐疑」という仕組みで取り除かれてしまう。色は光の量によって変化する以上、物から色を取り除く。重さは、エレベータの発着時には、変化する以上これも物の性質から取り除いてしまう。そんなふうにしていくと、ほとんどの性質は世界から取り除かれてしまう。色も形も重さのない世界を想定してみてほしい。途方もない世界が成立する。

アラカワ+ギンズ構想の補助線33

- 物の性質として残るのはごくわずかである。それが延長である。デカルトによれば、物の本性は延長であり、心(主観性)の本性は、「思考」(思うこと)である。もっとも物の広がり、圧力次第で変化する。そうなる、と延長も変化する。強い圧力のものでは、圧縮され、弱い圧力のものでは拡散する。そうなる、と物の本性は、延長の嵩ばりではなく、端的に物そのものの位置である。位置を本性とする物質相互の連なりが、物質世界であり、位置と位置の関係で組み立てられる世界は、「解析幾何学」の世界である。

アラカワ+ギンズ構想の補助線34

- ハイデガーは、自分の位置の指定を、現存在の「実存」の要となる要件の一つだと考えていた。それはDaseinに見られるように、現存在にはここ(Da)の指定が伴うのである。実存のさいに、ここという実存の位置指定が不可分に含まれてしまう。このDaの配置をあたえるのが、世界であり、Daseinは世界内存在であり、同時に世界内の不連続点でもある。
- では人間(Dasein)だけではなく、動物、植物、岩、石ころはどうなるのか。少なくとも動物も、ここという存在の位置指定を行っている。位置指定は、生命的運動にかかわる基本能力であり、存在論の要となる概念ではない。ハイデガーは言葉に引っ張られて、ただ誤解している。

アラカワ+ギンズ構想の補助線35

- アラカワ+ギンズの構想では、世界の中に位置を指定する行為が、基本となる。位置を占めることが、同時に世界とのかかわりを形成することであり、位置を占めるという運動が、同時に世界内で自己形成を行うことであり、位置を占めることが、同時に世界そのものを変容させていくことである等々の多様な仕組みが、位置指定に込められている。これは「身体行為幾何学」となる。

アラカワ+ギンズ構想の補助線36

- 一つの行為が、つねに同時に(immer zugleich)、二重の働きをもってしまふ。その典型例が、ランディング・サイトだった。
- 軽度の認知症では、「見当識障害」が早期に出る。たとえば駐車場で自分の車を止め、買い物をしてスーパーを出た後、自分の車をどこに停めたかが分からなくなる。(軽度だが、私自身にもすでに出ている) それ
が昂じると、散歩に出た後に、自分の家がどこなのかが分からなくなる。行為能力の最初の場面に、ランディング・サイトが働いている。
- ランディング・サイトの能力を全面活用して、アラカワ+ギンズは建築の組み立てを構想していった。

アラカワ+ギンズ構想の補助線4 身体行為生態学

- ランディング・サイト以降の展開について。身体行為生態学
- 生態心理学について、ギブソンをアラカワは比較的高く評価していた。ことに発達心理学的局面に関心を持っていたと思われる。たとえば物の運動はどのように知覚されるのか。幼少期では、或るものが或るものを隠す。この遮蔽という事態を運動だと知覚している。ところが生後一年後ぐらいから、物の運動を相対的位置移動というかたちで知覚するようになる。つまり自分の身体とともにある運動が可能になることで、知覚も変わってくる。そのためには運動のモードを変えていくと、知覚さえ形成される。
- 知覚の形成に踏み込んだのが、コーディノロギスト＝アラカワである。

アラカワ+ギンズ構想の補助線41

- 走り幅跳びの踏切板の位置は、そこまで到達することに要する時間で知覚される(デヴィット・リー)。それはただしい科学的な発見である。しかし、踏切板までの到達時間と、それに連動させる形での空間的な指標との関連づけを行う仕組みがなければ、身体の制御はできない。
- 知覚とは、一つの抽象(捨象)であることになる。この捨象の結果を現象学は、出発点とした。
- 踏切板までの走る速度を変える。すると到達時間は変わる。この変化は身体体勢の制御にかかわる変化をもたらす。走る速度を変えたときに、踏切板までの残り時間という知覚のモードは変わらないが、身体制御の仕組みは変わる。わずかな体重の変化も身体制御に影響がでる。こうした事態を生態心理学は組み込むことができない。

アラカワ+ギンズ構想の補助線42

- 能力の形成へ。
- このとき経験の拡張に向けて関与しているのは、身体、運動、感覚、知覚であり、言語の関与はほとんどない。それぞれが新たな選択肢に直面するように建築的環境を設定する。この環境内での身体を伴う行為が、能力の形成をもたらすようにできれば、「天命反転住宅」となる。このとき言語は、言語イメージとして、行為の多変数化に寄与する。
- 身体行為生態学は、行為能力の形成であると同時に、行為者のイメージ形成でもある。行為能力の形成の環境設計が、建築であり、イメージ形成の手掛かりとなるのが、テキストである。